

献辞

二〇〇六年度をもって人文学部社会科学科の西川洋教授が定年退職されます。

西川先生は、一九七三年に三重大学教育学部に助手として赴任され、その後一九八三年に人文学部の創設に伴い、人文学部教授に就任され、日本政治史を担当されました。社会科学科長、評議員、人文学部長を歴任され、学部ばかりでなく大学全体にも大きな貢献をされました。

本来ならここで研究のご功績を紹介すべきところですが、私は分野も離れておりその任ではありません。ただ、三重県史、四日市史などの編纂に尽力され、また、山川出版社『三重県の百年』『三重県の歴史』の著者にも名前を連ねていらっしゃることは承知しております。これは先生が地域にとっても貴重な存在であることを示しています。

そこで、異例かもしれませんが、ここでは私の印象に残っている西川先生のお姿を留めることにより、献辞とさせていただきますと思います。

私が学部にて赴任してきたときは学部創設4年目で、これから学部を発展させていこうという機運に満ちていました。さまざまな機会に学部の将来について語り合い、その後しばしば繁華街に繰り出してカラオケ合戦を繰り返しておりました。先生はそんな場に必ず加わっておられ、お得意の演歌で独自の世界を作り出していらっしゃいました。

公の場では、教授会の議長としてきばきと議事をさばいていかれ、逆にフロアにいらっしや

るときには提案などの不明瞭な点を厳しく追及される姿が印象的でした。そして、まさか私がその矛先にいるような事態になるとは夢にも思わなかったのですが、定年間近になっても学部あるいは大学執行部への追及の姿勢は衰えるどころか、むしろ厳しさを増したような気さえしました。教授会で先生の質問が出なければほっとするというような日々でしたが、いつのまにか、先生の指摘にも耐えられるように議事を進めようというのが私の中で目標になっていました。

先生のそんな姿勢は多くの教員たちが尊敬するところですが、実はそれだけではなかったのです。先生はことあるごとに、学部長室に立ち寄られ、さまざまな情報やアドバイスをくださっていたのです。私も定年を迎えるときには先生のようにありたいと思うようになりました。まだ学部長として一人前とは言えないのに、来年度から教授会に先生のお姿がないのを心細く思っています。でも、私はそこに先生がいらっしゃるつもりでこれからも議事を進めていこうと思っています。そして、先生を模範として、常に広い視野で学部のことを考える人材が育っていくと確信しています。

学部を代表してこれまでのご尽力に心より御礼申し上げ、先生にこの論文集を捧げたいと思います。

二〇〇七年三月

人文学部長 井口 靖